

# ある医師のこと

5月末の「おはよう日本」で、体重245グラム、世界で最も小さく生まれたとみられる女の赤ちゃんが、アメリカの病院を無事退院したというニュースを放送していた。3月には日本でも、体重268グラムで生まれた男の赤ちゃんが3200グラムまで成長し、慶応大学病院を退院したというニュースが話題になった。医療の進歩は驚くばかりだが、こうした低体重で生まれた赤ちゃんの医療に大きな足跡を残した、岩手県出身の医師がいることをご存知だろうか？

岩手医科大学名誉教授の藤原哲郎医師（88）。今は診療の一線を退き、盛岡市内にお住まいである。私は記者として医療や文化の取材をし、ノーベル賞取材の社内事務局もしていたが、恥ずかしいことに藤原医師の名前を聞く機会はなかった。しかし、1990年代以降、著名な海外の賞を複数受賞されており、業績はまさにノーベル賞級である。去年、盛岡に赴任した後、先生のことを知り、伝手をたどってお目にかかれたことは幸いだった。

藤原医師は50年代半ば、駆け出しの医師時代に受け持った赤ちゃんが、呼吸不全か

らなすすべもなく亡くなることに大きなショックを受け、その克服を志したという。RDSⅡ呼吸窮迫症候群と呼ばれるこの病態は、1500グラム未満で生まれた早産の子供に多く見られる。肺の呼吸機能を担う「肺胞」という風船のような組織がつぶれて膨らまなくなることにより、重い呼吸障害を起こす。

この病気の原因は何なのか。藤原医師が研究したのが、「サーファクタント」という物質だった。この物質は肺胞の細胞が作っていて、肺胞の表面を覆うことによって組織を守り、膨らんでもつぶれない作用がある。未熟児は、このサーファクタントを十分作れないため、RDSが引き起こされるのではないかとという仮説である。

60年代から70年代にかけて、藤原医師は2度にわたり留学したカリフォルニア大学ロサンゼルス校で研究を続けた。この間、アメリカの別のグループが、RDSの赤ちゃんにサーファクタントの成分を投与したが効果がなかったと報告し、サーファクタント説が否定されたこともあった。しかし、それまでの研究からサーファクタント説を



NHK盛岡放送局長  
よしじ  
大久保 嘉二

確信していた藤原医師は、秋田大学の助教として帰国した後も研究を続けた。製薬会社との共同研究で人工のサーファクタントを作り上げ、78年に臨床試験を開始。効果は劇的で、危篤状態の赤ちゃんがみるみる改善したという。

この成果は、80年1月、イギリスの権威ある医学雑誌「ランセット」に発表。RDSに対し、世界で初めて有効な治療法を示した論文は、この号のトップを飾った。その後、この人工サーファクタントは治験が行われて製剤化され、今や世界で様々な種類のサーファクタント製剤が使われている。早産の赤ちゃんのRDSはこうして克服され、世界で、新生児の死亡率を大きく引き下げることにつながったのである。

藤原医師は81年から岩手医科大学の教授を務め、NICU（新生児集中治療室）を開くなど、新生児医療のさらなる充実に力を注いだ。体重500グラムで生まれ、今は看護師として、県内の医療現場で働いている女性もいるという。日本発、岩手発の医療が、世界のスタンダードになっていることを誇りに思う。